



局面と動かすための次の手が思いつかず、芹亜はチェス盤を食い入るように見ていた。考えているふりをしていても、集中できないまま、心はぼんやりと別のところを漂っていた。

ただでさえ、陵聖の方が圧倒的に強いのに、こんな状態ではどうにもならないと、芹亜は感じていた。

まさに、迷路の中に迷い込んでいるように。

「どうしようかな」

と迷っている訳でもないのに、それらしい素振りをしながら、芹亜は呟いた。

「やる気ないだろ、あんまり」

という陵聖の切り返しに、芹亜は曖昧に笑ってごまかすことしかできなかった。どうせ、陵聖さんにはごまかすことなんかできない、と思いながら芹亜にはそれしか選択肢がなかった。

チェス盤上の局面はもう20分くらい動いていない。

チェスは陵聖が芹亜に教えたもののなかで彼女が苦手になっているものの一つ。

芹亜が勝ったのも数えるほどしかなかった。

それでも負けず嫌いな芹亜は何度も勝負を挑んできたし、やっているときの彼女はそれなりに真剣だった。

まったく集中できていない芹亜の様子に陵聖は気づいていた。

それでも彼は自分から何かを聞き出したりすることはなかった。

いつものように芹亜の心の準備ができるのを待っていた。

何かを話したくて、ここに座っているのだろうと思いながら。

会話の途切れた静かな部屋に硬質な電子音が響く。

芹亜はびくっとして、音のする方を見た。

陵聖は何気なく受話器をとると、抑揚のある流暢な英語で話し出した。

アクセントのはっきりしている英語での会話は音楽のようだった。

最近、頻繁にかかってくる電話の意味を芹亜は知っていて気づかないふりをしていた。

陵聖も電話の内容を隠そうとする様子もなく、芹亜の前で話していたし、聞かせる意図があったのかも知れないと感じるときもあった。

内容はいつもと一緒だ。

「ニューヨークに來い」という誘い。

こんな時には陵聖が有名な人で、才能を信じられている選ばれた人で、本来ならこんな近くにいる人でないことをふっと思い出す。

あの時から私はずっと陵聖さんに甘えっぱなしだった。

そして、近いうちにこの心地のよい場所を失うことになるかもしれない不安に苛まれる。

陵聖が適当にはぐらかして、何事もなかったかのように受話器を置き、次の一手を促すような仕草で芹亜を見た。

チェス盤と陵聖の顔を交互に見てから、芹亜がつぶやいた。

「どうせ、陵聖さんには勝てないよ」

「何、言ってるんだよ。いつも勝つ気でいるくせに」

芹亜はなす術もなく、助けを求める視線を陵聖に向けた。

いろんなことに気付いているはずなのに、それを、おくびにも出さず、芹亜が言葉を発するのを待っている。

柔らかい何かにまるごと包まれているような、そんな感じ。
だから私はここから抜け出せない。居心地のよさに甘えてしまうという。

「仕方ないじゃん。だって」
「だって？」

陵聖はお気に入りのバカラのブランデーグラスをゆっくりと揺らしながら、芹亜の心の奥を覗きこむような目つきで言葉を投げかけた。

「今日、葉書が来たの。同窓会の。ただ、それだけなんだけど、落ち着かなくて」
「同窓会ね」
「そう、もう、何年も連絡なかったんだけど、この間、ばったり会った同級生に住所を教えたから」
「それで？」
「それでって？」
「芹亜はどうしたいんだ？」

陵聖の深く響く声で静かに発せられた言葉は容赦なく芹亜の気持ちを揺さぶった。もともと揺れていた気持ちは大きく波を打つようにゆらゆらと揺れ動く。

「どうしようかな、とあって」
「行けばいいじゃないか、楽しいぞ、懐かしい連中と会うのも」
「陵聖さんは意地悪ね」
「何を今さら」

芹亜には他につなぐ言葉が思いつかなかった。
ただ反射的に言葉を返すのが精一杯だった。
懐かしい連中、といいながら陵聖がそこに含めた意味はたった一つしかない。
行きたいという気持ちと、行かない方がいいという気持ちが揺れているのは、尚登のことが頭にちかつくから。
もし、会ったらどうしようと言う気持ちと、あれからどうしたのだろうと言う好奇心と、説明できないもやっとした感情とが、あっちにいたり、こっちに行ったりして、定まらなかった。
考えても結論は、もちろん出ない。

「だったら、なおさらだな、チェス続けるか？上手いもんでも食いに行くか？それとも飲むか？」

陵聖は芹亜の背中を少しだけ後押しした。
それだけで十分だった。
後は自分で決めるしかない、どちらを選ぶにしても。

「イタリアンがいいなあ。しっかり食べたい」
「了解。準備してくるから、待ってて」

それだけ言い残すと陵聖は身支度を整えに部屋に入っていった。
芹亜はチェス盤を片付けながら、リビングに置いてある大きな大きな水槽に見入っていた。
陵聖の趣味で集められた鮮やかな色とりどりの熱帯魚が水槽の中をあてもなく漂っている。
芹亜はふと、この熱帯魚と自分が同じじゃないかと、考えていた。

どんなに泳いでも、結局、どこにもたどり着かない。
同じところをぐるぐると回りながら、安全な水槽の中に漂っている。
この水槽を出て大きな海に戻れといわれてもきっとすぐにはそんな気持ちになれない。
そう、ここにいれば、傷つくことも、何かにおびえることもない。

こんな風にいつまでも甘えていていいのだろうかと何度も思いながら、思いを封じ込める。

陵聖さんと知り合ってからもう7年近く。
それでも熱帯魚みたいな私はどこからこの状況を変えていいのかわからないでいる。

「芹、行くぞ」

陵聖は薄手のジャケットを羽織り、部屋から出てくると芹亜に声を掛けた。

「あ、うん」

芹亜は陵聖の後ろについて行き部屋を出た。
私を守ってくれる居心地のいい場所はいつまでこのままここにあるんだろう、と陵聖の背中を見ながら、
ぼんやりと感じていた。